

シリーズ

ひらつかの年中行事 ⑪

初午の稲荷講

赤い鳥居に陶器の白狐が印象的なお稲荷さん。市内各地に祀られており、とくに旧家の屋敷内で見かけます。ただ、古くからの家に必ずお稲荷さんがあるとは限りません。平塚には、ジエンといって、ずっと昔に屋敷や田畑を半々に分け合った家同士を指す言葉があります。ジエン関係にある場合、両家で一つの稲荷を一緒に祀る例もあります。地域の数軒が共同で稲荷社を祀る場合もあります。須賀（現在の港地区）では、おおむね北・横・仲・南・西の町内単位で稲荷社を祀ります。このように、稲荷の祭祀形態は、個人、本家と分家、一族、集落単位など様々です。元は個人で祀っていた屋敷稲荷に分家や近隣の家々が加わり、共同の稲荷となった例も見られます。

稲荷のお祭りは稲荷講といい、初午に行います。初午とは2月最初の午の日のことです。この日に京都の伏見稲荷大社の神が馬に乗って降臨したということから、全国的に初午を稲荷の祭日とする所が多くみられます。近年は2月11日の祝日に固定する所が増えていきます。稲荷講の日は、小豆飯か赤飯、油揚げ、魚などを稲荷へ供えます。近隣の家々で稲荷講を組んでいる場合は、自家と講中各戸の稲荷へ供物をあげに回り、ヤド（当番宅）へ集まって飲食を共にします。小豆飯は赤いご飯ともいい、米にササゲを入れて炊いたご飯で、ワラのツトッコに包んで稲荷へ供えます。かつては小豆飯を



稲荷講のヤドに立てられた幟

おにぎりにして、集まった子供たちへ分け与えました。また、一般に正月のお飾りは1月14日のセトバライ・ドンドンヤキでお焚き上げしますが、歳神棚や大神宮棚のお飾りは燃さずにとっておき、2月1日のオタナサゲで外し、初午に稲荷祠の前で燃すという家が少なくありません。



稲荷講の供物

稲荷とは“稲成り”から転じた言葉とされ、農業神としてはもとより、漁業神、商売繁盛の神として広く信仰されています。ただし、平塚の伝承をみると「疫病がはやったときに熱心に稲荷をまつたら病気に罹らなかった」とか、「稲荷は悪い者が入ってこないように家を見守ってくれている神」などといわれ、稲荷神としての機能よりも、家屋敷の守護神という性格が濃いいといえます。屋敷の南西（裏鬼門）や北東（鬼門）に位置する例が多いこともこれを裏付けています。

*撮影地はどちらも平塚市北金目

平塚市文化振興基金にご協力を!!

平塚市文化振興基金は、市民文化の振興を図るために活かされます。基金に御寄附くださる方は、平塚市文化・交流課まで御一報ください。御支援をよろしくおねがいいたします。 ☎0463-32-2235

平塚市文化振興基金にご寄附をいただいた方
H23.7月から9月まで
■ 湘南新舞踊協会 (23.8.14) (敬称略)

平成23年度文化振興基金活用事業

基金はこんなところに役立てられています

- 木谷實・星のプラザに新しい収蔵品を展示しました。平塚が誇る囲碁界の巨星、木谷實九段が日本棋院から殿堂入りを受賞したことを記念し作成されたブロンズレリーフと、同じデザインのもの展示しています。殿堂入りを果たしたことにより、木谷實氏の功績は永久に伝承されます。
- 平塚市が長年取り組んできた子ども囲碁教室に、プロ棋士が指導する上級教室を開設しました。平塚市の囲碁教室出身の子ども達が、全国大会でも上位に入賞しています。平塚市からプロ棋士が生まれる日も、そう遠くないかもしれません。